

古事記に学ぶ その 22

応神天皇の御代と御子たち その 2

<1> 蟹の歌(宮主矢河枝比売との出会い)

ある日、品陀和気命(ほむだわけのみこと:応神天皇)が、大和から都に近い淡海の國へ山を越えてでかけた時のこと。宇治野の畔に立って葛野(かずの)の平野を眺めまわしながら歌を詠んだ。

そして、木幡(こはた)の村に着いた時、道の分岐点で美しい乙女に出会った。「お前は誰の子か」と問いかけると、「私は●丸邇之比布礼能意富美(わにのひふれのおおみ)の娘で、名を●宮主矢河枝比売(みやぬしやがわえひめ)と申します」と答えた。

天皇は、「明日帰り道で、お前の家に寄ることにしよう」と約束してその場を去った。

宮主矢河枝比売が家に帰って、父に報告した。父(丸邇之比布礼能意富美)は、「それはきっと天皇だ。喜んでお仕えなさい」と言って、屋敷を飾り付けてお待ちし、到着すると、ご馳走でもてなした。

天皇は盃を手に取り、食膳にある蟹の塩辛を見ながら歌を詠んだ。歌では、蟹の話に始まり、ここで出会った比売を称える言葉で結んだ。

そして二人は寝所に入り、のちに●宇遲能和紀郎子(うぢのわきのいらつこ)が生まれた。

<2> 父から子に譲られた姫(髪長姫の話)

天皇は、日向の諸県(むらがた:現在の宮崎県諸県郡)の君の娘●髪長姫(かみながひめ)が見目麗しいという情報を得て、召し使おうと思って都に呼び寄せた。

髪長姫が難波津に船を着けたところ、たまたまそこを通った日嗣の御子である大雀命(おおさざきのみこと)が、一目見ただけで好きになってしまった。

大雀命は建内宿禰を呼び、「この娘を私に賜るように、天皇に話をしてもらいたい」と伝えた。

天皇は、大雀命に譲ることに同意した。そして新嘗祭の席で三者が同席して、話が決まった。

<3> 大陸からの渡来者

この天皇の御世では先に大山守命(おおやまもりのみこと)に命じたように、漁業のことに従う海部(あまべ)・山林のことに従う山部(やまべ)と山守部(やまもりべ)及び伊勢部(いせべ)を定め、また剣の池を造った。

また、この御世には新羅の人たちが海を渡って渡来した。建内宿禰命は、これらの人たちを築堤作業などに使い、百済の池の造成にも貢献した。

百済の●照古王(しょうこおう)が、牡の馬と雌の馬を一頭ずつ、●阿知吉師(あちきし)という者に託して献上した。この阿知吉師は、のちの阿直(あじき)の史(ふびと)の祖先となった。

またこの他に、太刀と大鏡を献上した。そして、百済の國に賢人がいるならぜひ来訪するように言いつけた。この命令に答えて渡来したのは、●和邇吉師(わにきし)。その時に論語十巻と千字文一巻を献上した。この和邇吉師(またの名は王仁)は文の首(おびと)の祖先となった。

工芸に長じた手人の内から鍛冶に巧みな韓鍛(からかぬち)の●卓素(たくそ)という者、機織りに巧みな呉服(くれはとり)の●西素(さいそ)という者を献上した。

また、この御世では、秦(はた)の造(みやつこ)の祖先、漢(あや)の直(あたえ)の祖先などが海を渡

ってきた。酒作りが巧みな人は●仁番(にほ)と言い、別名を須須許理と言った
須須許理が酒を醸して天皇に献上した。天皇は味わい、満足して歌を歌った。
そして歌いながらふらふらと出かけたが、二上山を越えて大坂まで来た時、道の真ん中にある大きな
石を杖で叩くと。石が逃げ去った。「堅石も酔人を避ける」という諺の起こりとなった。

<閑話休題>

前述の渡来人の土産の内、「千字文」が出来たのは6世紀頃なので、この応神天皇の時代に百済から持ち込まれたという記述はおかしい、とする見方が主流のようで、すでに江戸時代に新井白石などにも指摘されているようである。

天皇は新羅からの渡来人が醸した美酒に酔い、ふらふらと出かけた……ということだが、
宮殿つまり軽島の明(あきら)の宮から二上山まで、現在の地図で確認すると約15Kmある。
この道は大和から穴虫峠を越えて難波につながる道だった。
ぶらりと散歩するには少々遠距離のように感じるが……。

<4> 大山守命(おおやまのりのみこと)の叛乱とそのあと

応神天皇が崩御したあとは、天皇の思召に従って、大雀命(おおさざきのみこと)は天皇の座を宇
遲能和紀郎子(うじのわきいらつこ)に譲った。これに反して大山守命は天皇の意向を無視して、兵を
集めて謀反を企んだ。

これを察知した大雀命の報告を受けて、宇遲能和紀郎子は作戦を立てた。宇治の河原に兵を配置し
て、宇治山の頂上に御子の所在を模した仮屋を建てた。そして、そこに御子がいることを見せるために
変装した代役を座らせ、入れ替わり立ち代わり要人が出入りする様も演出した。仮屋の壁は帳(とば
り:蚊帳のような物)になっており、外部からは中の様子を微かにうかがうことができる。

そして宇遲能和紀郎子は、粗末な衣装に身を包み賤しい格好に変装して、船の上に立っていた。
そこへ現れた大山守命は、船に乗り込むや船の男にさりげなく語りかけた。

「この山には大猪がいるらしい、私がそれを仕留めてやろうと思っているんだが、どうだろう」
「それは、難しいでしょう。今まで何人もの人が挑んだけれど誰もできていません」と言葉を返して、
河の中ほどまで船が進んだところで、船を傾けて大山守命を水中に落とし入れてしまった。川の流れ
は思いのほか早く、間もなく水底に沈んだ。大山守命の死体は河の底から引き揚げられたのち、奈良
山に葬られた。大山守命は、土形(ひじかた)の君・弊岐(へき)の君・榛原(はりはら)の君などの祖
先である。

大雀命と宇遲能和紀郎子は、「天下を治める位」を譲り合って受けなかった。しかも、海人の貢物の新
鮮な魚介が、両家の間を何往復もする間に腐ってしまい、道端に捨てられるような事態にまで至った。
しかし、宇遲能和紀郎子は不幸にも早く亡くなってしまい、結局大雀命が天下を治めることになった。
応神天皇は(のちのページの記述によれば)130歳で崩御したことになる。第一后の子である
大山守命と、第二后の子である大雀命と、第四后の子である宇遲能和紀郎子の三人を後継候補とし
たが、三人からの絞り込みが進まぬ間に様々な事件が起きて、結果として大雀命が16代の天皇となっ
た。

この天皇が130歳まで実務をこなしていたのか空白期間があったのかについてはよくわからないが、
行政実務は建内宿禰命が取り仕切っていたと読み取れる。

以上

応神天皇と日嗣の御子を中心とした系図

*表記の注釈 過去の天皇 応神天皇 日嗣の御子

